

1 八代やしろというところ

口絵の地図を見ましょう。この地図は八代の範囲をあらわしたものです。赤点線内が昔からの八代の範囲で、緑の線内は住居表示ができている所、新町名と昔からの八代地域との関係をあらわしています。

八代の範囲

地図を見てわかりにくい点、注意して見たいところを簡単に解説しておきましょう。

1 地図の右下のほうは八代とかいてあるだけで緑の線はありません。住居表示がしてないからです。ここには八代新道、八代富士才町、八代御茶屋町、八代東ノ町の四町がありますが、これらは自治会がつけた町名です。

2 西高付近は赤点線の外へ出ています。ここはもと伊伝居でしたが住居表示で北八代二丁目になりました。

3 梅ヶ谷町の中央に赤点線が走っています。線から北は北平野でした。梅ヶ谷町は北

平野地区と八代地区とを半々にとりいれてできた町です。

4 八代緑ヶ丘町の西の境界は赤点線と緑線がくいちがっています。緑ヶ丘町の西は新在家ですが、新在家を少しだけとりいれて八代緑ヶ丘町としたり、八代をとりいれて北新在家二丁目としています。

5 姫路短期大学は東部だけ八代でした。しかし新町名は新在家本町二丁目です。

6 短大の南方は広い道を境にして新町名ができています。もとの八代の線は一目でわかるでしょう。

八代の地形

八代の北半分は山地で、南半分は平野です。行者堂の山は

地番と住居表示

地番 明治時代村ごとに、田、畑、山、宅地の一つひとつに番号をつけたもの。今も土地登記簿には地番が記入しており、土地売買、譲渡には必ず地番を書く。

住居表示 地番は順序よく並んでいないので分かりにくい。そこで住宅を分かりやすくするため

姫路市○○町○番○○号

としたもの。住居表示がしてある町は、このことお知りをおくのがよい。

八八が、梅ヶ谷地藏南西の山がいちばん高く一三二mです。最北は峠で、そこから城乾

中学まで二・一キ、東は河間町に接し、そこから城乾中学まで一・五キあります。

八代の中を船場川が北東から男山の方へ、大野川(昔は大野谷川といった)は北から流れ、男山の東で船場川に合流します。

卷末の用水路地図を見ると、どの用水路も北東から南西へ流れています。八代は南西方向に傾斜したごくゆるやかな扇状地の

上にあります。

73Pの地図を見ると、大昔は市川が八代を流れていたことが想像できます。八代でも高い建物を建てるため地下深く掘る工事が近年おおくまりましたが、たいていの所は地下は砂礫層で、もと河原であったことを示しています。また上水道の町裏水源地は地下水を汲み上げていますが、水が豊富なのはこのことを裏づけています。

野里・日吉神社西 二一・〇m

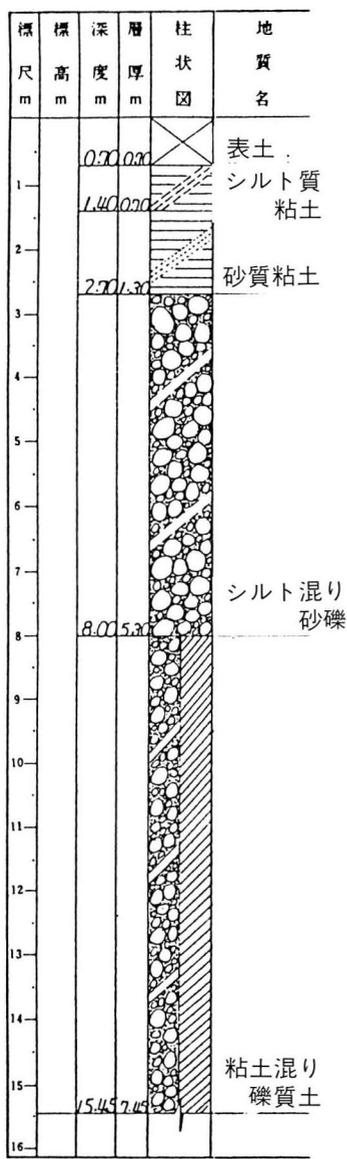
さくら銀行野里支店前 一八・四m

八代本町二丁目川端 一五・八m

姫路短大東南角 一四・八m

城乾中学東南角 一四・五m

メゾン富士才建設地、地質柱状図(ノア建築設計室提供)



地形 市街地北半の地表傾斜は三五〇〇分の一で扇状地性低地に近い。

地質 姫路累層群(姫路酸性岩類)に属する白亜紀(約一億年前)の岩石で緑に乏しい山肌。

植生 アカマツ、クロマツの二次林を主体としたものが多く、本来あるべき植生の暖地性常緑樹林は極めて少ない。

『姫路市都市景観策定調査報告書』

宅地と畑があった所（明治一五年ごろ）
 家は大水がでて安全なところに建て、畑は水の
 引きにくい所にできる。
 この図は明治一五年ごろ作られた地図をもとにし
 て宅地と畑のあった所を書き入れたもの。微高地
 のあった所がくわしく分かる。
 富士才と前替東部の微高地は明治三四年ごろ姫路
 師範学校ができるとき、そこから土を取ったので
 今は一部低くなっている。

前替の西端は明治四二年ごろ
 姫路中学校ができるとき土取りした。
 中八代には昭和一四年、姫路高等小学校
 ができた。
 黒線は道路。この地図は略図なので主な
 道だけしか書いてない。一丁は字の境。



宅地の筆数	
富士才	十四
出口	二五
御茶屋	一三
町裏	一七
狭河	二九
垣根	一三
榎	一一
山陰	一一
宮跡	三七
宮有地	三七

微高地分布図



中の井堰の修理 (昭和30.7 矢内 写)

中の井堰は八代富士才町、お茶の水橋の北にあったが、今は北100mに移されコンクリート製になった。ここから分流した水は八代本町一丁目にあった御用水車(→88P)を回し、明治には姫路紡績所の水車や、播陽時計会社の水車を回した。

船場川

市川から分かれて八代を流れる船場川は御禊川、思可麻川、大川、また一説に雲見川といわれていました。大川とは東方の小川に対する名で明治時代でも、その名が残っていました。(↓151P)。船場川の名になったのは姫路城下町ができ、飾磨から舟が上ってくるようになった江戸時代からのことです。

この川の恵みで八代でも二千年も前から米づくりが行なわれていました。時代がくだるとともに、水門や堤防を作って水を調節し、水車をまわしたり染物をさらしたり、舟も通して物を運ぶなど、いろいろに利用してきました。

八代は船場川 「エジプトはナイルのたまのたまもの」というでしょう。早

くから人がそこに集まり、古代文明の花がさいたのはナイル川の恵みによるという意味です。わが八代も船場川の恵みによって開けました。二千年ほど前の弥生時代の富士才遺跡や深田遺跡のことは32Pで見るとにし、ここでは江戸時代以後船場川からの用水路がどのように作られているかを見ましよう。

巻末の折込図を見ると、水路が網目になつていてでしょう。昔はもつと複雑だったので水田が減り、都市化が進んで、水路の上に蓋をしたり、ヒューム管に変えてその上が道になった所をはぶき、昔のおもかげを残している部分だけ書きました。

網目の水路を右上へたどっていくと、やがて船場川にたどりつき、そこに井堰が作られています。この井堰と長い長い水路が、いつの時代に、どのようにして作られたものか残念ながら記録も言い伝えもありませ

ん。この調査をしてみると、両岸に石を積んだところ、トンネルにしてあるところなどが見つかります。さらに「意外や意外、船場川の水はこんな所にまで流れてきているのか」とおどろきます。

では地図の右から、つまり八代の東部から見ていきましょう。

野里ゆ 「ゆ」とは水田に入れて稲を育てる用水のこと。地図の上のほう、河間町から八代へ出てきた水は雲松寺の北・西の田（八代の東部）を潤しました。この水は、こよりほるか東北一・八、水上小学校南西にある薬師堂のすぐそばの七分三分井堰から船場川と分かれてきたのです。そのルートは姫路市農協水上支所の東を南下し、西へ曲がって日吉神社（山王さん）の北から西へ回って流れてくるのです。

町裏ゆ 姫路工業高校の東にあった町裏井堰から分かれ、船場川の東側の田を潤しました。この方面も水田がなくなつたので、井堰は船場川の改修工事のときなくなりました。

野里ゆと町裏ゆ

町裏水源付近で二つが合流し、南流して榎橋の東の田をうるおした。

河間井堰

寛保二年の北八代村明細帳にこの名が見えるが、場所はどこかわからなくなつてしまった。

した。地図に…線で示した北端に井堰があったのです。この井堰と水路は、もと御茶屋垣内と東光寺垣内の人々が修理や管理をしました。

宅田ゆ 工業高校の東、町裏井堰の南十メートルにある宅田井堰から船場川のすぐ西を流れ、東光寺町、北八代一丁目の南半から八代本町二丁目へ行き大野川へ排水します。この井堰も御茶屋垣内と東光寺垣内の担当で、水路は折込地図にあるA地点までが両垣内の「カドヤク」でした。「カドヤク」というのは農民全員が出て「溝さらえ」をすることをいい、農民の義務でした。

A地点から分かれて南下する水は八代本町二丁目にあった北山水車(↓140P)を回していました。

しもうてみ お茶の水橋のすぐ北にあった中の井堰から分かれ、御茶屋町、本町二丁目を経て本町一丁目の田を潤す水路です。ここを通る用水には、これまでのように何々ゆと言う名がありません。この内の幹線水

路を「しもうてみ」といいます。

この水は白川裏で田摩水車を回しました。そこには江戸時代に御用水車があつて菜種の油絞(↓88P)、明治には姫路紡績(↓127P)があつて、それらの水車も回しました。

また昭和初期までには、御茶屋町・ラックキーパンの所に松本染工場、少し南に寺島染工場があつて、染め上がった布をこの水路に入れてさらしていました。

早森ゆ 伊伝居・桑原神社前の早森井堰からの水で、この水路は早森井堰の西百メートルに分かれます。



井堰

川の水を分流させるため、せき止めた所。昔は大きな石を並べたが、今はコンクリートになった。

ゆぜき

井堰を補修して分流しやすくする作業のこと。

▲ 早森井堰のゆぜき 昭三二、七



早森ゆの溝さらえ 西校の西側で(昭和32.5 矢内 写)
西校の体育館はまだ建っていない。遠くに広嶺、増位の
山々が見える。

ひと筋は城北小学校内へ、その構内から西へ出て、西高の北から西へ回って北八代一丁目の北半の田を潤します。また西高の北東角から南下した水は東光寺町の北部の田を潤します。城北小学校内を南下し、工業高校内を南下した水は、八代富士才町西部の田を潤して宅田ゆに合流していました。もうひと筋は西高の北西で大野川の川底をくぐり、八代宮前町を南西へ、姫路短期

大学の南東から南八代町へ、その内の一つはやきもちゆ(大野川から元町への用水路)の上を石製の樋を通して男山の西方へ流れます。また「短大の南側を西へ行った水は南新在家から岩端町(この地図より南方)へ達します。八代に関係する用水路の内、最も規模が大きく複雑です。」(石野輝次)寛保二年(一七四二)の『北八代村明細帳』に、この用水がどれほどの田を潤していたかが書いてあります。

水懸り高 高 一二〇石 南八代村

高 九〇石 伊伝居村

高 二六〇石 新在家村

高 一一〇石 山野井村

高 六〇石 北八代村

当時この辺の田でとれる米は平均で一反に一石八斗ほどでした。割り算して面積になおすと南八代村で六七町歩、北八代村で三三町歩、つまり南北八代村の水田のうち百町歩をこの早森の井堰からの用水で潤していたのです。

一石：ドラムかん約一本

一斗：一石の十分の一

一町：約百m四方

一反：一町の十分の一

約三二m四方

まいこみ場と吹き上げ

西高校の北西角で早森ゆが大野川の下をくぐって八代宮前町へ出る。水が多くなると渦を巻いて吸いこみ、反対側では吹きでてくるので昔からこう言った。今も見られる。

(石野輝次)

「七月になって田に水を引く時になると、どの井堰も補修します。早森井堰はいつの頃からか北八代の担当となり、松の杭二、三〇本、土囊二、三〇をつくり、川の中に

流されていた石を積み上げ、杭を打って止める作業をします。北八代は全員といつても一〇人ほどです。作業が終わると、その年の当番の門に集まり、その家族が用意していた御馳走を食べます。まず酒で舌鼓を

打ち、いりじゃこ、酢の物・ちくわ・かまぼこなどを箸でとって、四方山話。時代が変わるとハム・ソーセイジも出てくるよう

になりました。そして最後に『ごくろはんでした』で別れます」（矢内 澄）

うわとい 東光寺山の山裾を通り、大歳神社の石鳥居の前から短大の北東方面に流れ、その辺りの田を潤しました。

この水は日吉神社の北の肩掛井堰から分かれ、増位川の川底をくぐり、軍人橋の北

詰めをくぐり、広峰一丁目（元の城北練兵場）の南端を直線で西へ、金山の東方から南へ

折れ、大野川の川底に並べた土管の中を通ってくるという水筋でした。

「大野川の水量が減ると土管が水面に出てくるので、子供たちはその上を渡って遊ぶことがあります。それで時々壊れるので、修繕しなければなりませんでした。」

（中山三郎）

この土管の樋も昭和四十三年、大野川の改修でなくなりました。

以上は八代の田へ来る船場川からの水路ですが、今いちど井堰を北から順にして整理しなおすと

七分三分井堰（西中島・薬師堂の横）からの

水は雲松寺の付近、八代の東部へ

肩掛井堰（野里・日吉神社の北）からの水は

大歳神社の前から短大の北東へ

早森井堰（伊伝居・桑原神社の前）からの水

は工業高校や西高の南へのもと、短大

の南方や男山の西へ

町裏井堰（工業高校の東・伊伝居字馬場先）か

らの水は町裏水源地の付近へ

井堰と堰と樋と

井堰 いせき

堰 い・せき・いせき

三つの訓読みがある。

樋（ひ）は水門、または水を通すために

に作った物。

船場川が市川から分かれる所を私た

ちは大樋という。そこにあるのは飾

磨井堰と書く。大樋にある中安繁次

翁功績碑（大正五年）に

「…飾磨郡保城村有水門曰大樋堰…」。

大正ごろ「おおひせき」といったよう

うだ。

うわとい は北平野からの水も受け

て水量はかなり多く、短大の北東の

田は日照りが続いても心配がありません。

宮前町南部で、早森ゆの上を

石の樋で越え、大野川のすぐ西の田

も潤しました。余水は南方へ流れ、

その方面の田に入りました。

（渡辺猛雄）

宅田井堰 (工業高校の東・伊伝居字清水田)か

らの水は西高の南へ

中の井堰 (お茶の水橋の北)からの水は男山

の北へ

となります。地図を見なおしてみると、八代の水田の約九〇パーセントが船場川の水で潤していたことがわかります。

その他の水路を見ましょう。

やきもちゆ 大野川の水を元町方面の田へ引く水路で、堰もこの方面の人が補修していました。しかし八代でも、この水を用いることになっていったのです。

「それは短大方面からの水がこの水路に合流していたからです。南八代町の東部の限られた範囲の田を潤していました。」

(渡辺猛雄)

山田の池二つ この地図より北にあるので、139Pの地図を見ると分かるのですが、大小二つの池からの水は短大の北の田に入っていました。

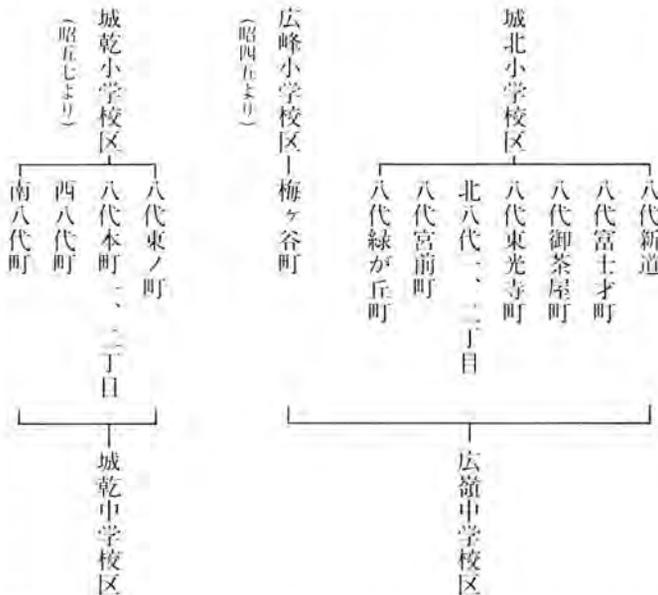
「池から出てくる水は、とてもきれいで、

水路では手のひらほどもある大きな黒い貝がとれました。持ち帰って炊いて食べたこともあるが、貝の中にきれいな真珠も入っていました。」(安倍房夫)

かやが谷池と竹林池 梅ヶ谷町にあり(139Pの地図) その付近の田を潤しました。かやが谷池を作ったのは古い時代のことですが、竹林池は文化七年(一八一〇)の『北八代村明細帳』に初めて出てきます。寛保二年(一七四二)の明細帳に見えないのでこの間に作ったことが分かります。

八代の校区

八代全域は、もと城北小学校区だったが、今は二つに分かれている。



八代は全国に今 八代とは不思議な地名で
どれほどあるか す。私たちの八代のほか
にも八代があることを聞きます。そこで全
国にある八代をひろいだし、いつごろから
その名がついたか、そのいわれはどうか、
などをしらべました。すると神社に由来す
るところが多いようですが、はつき
りしないところも、かなりあることが分か

りました。

次に八代が行政地名(役所がきめている地名)
になっているところだけをあげました。八
代をやしろと読むところだけをあげ、やつ
しろ、やじろと読んだり、社 矢代 屋代
の字を書くところは入れていません。

以下『角川日本地名辞典』より。

〔行政地名〕

〔由来〕

〔位置〕

茨城県 竜ヶ崎市 八代町 鎌倉期は社村 江戸期は八代村 地名は稲敷神社に由来 昭二九より竜ヶ崎市八代町 稲敷台地の南部 市街の北東方
茨城県 行方郡 牛堀町 八代 平安期は八代郷 戦国期は屋代 明二二、昭三〇は八代村 昭三〇より牛堀町八代 利根川北岸 霞ヶ浦の湖尻
富山県 氷見市 八代 鎌倉期は八代保室町期は八代荘 阿尾川上流の谷だににまたがり、全村山地 昭二七より氷見市八代 市街の北五キロ
岐阜県 岐阜市 八代 近世からの集落名 住宅地 畑、水田が残る 昭四九より岐阜市八代 市の北部
愛知県 名古屋市 北区 八代町 織田家の家老平手氏は八代政秀で絶えたからという説があるもと北区西志賀町・光音寺町の各一部 昭二九より名古屋
市北区八代町 城の北東
京都府 京都市 山科区 東野八代 昭六年からの町名 西に竹田川が南流 東は山科町東野字八代 盆地の中央部
京都府 綾部市 八代町 昭二八から現在の町名 西は綾部市奥黒谷 町名は鎮守八代神社にちなむ 市街の北東二〇キロ 上林川の上流
兵庫県 城崎郡 日高町 八代 中世は八代荘と八代郷 明二二に八代村の大字となる 昭三〇より城崎郡日高町八代 山陰本線国府駅西四キロ
兵庫県 朝来郡 朝来町 八代 口八代・中八代・奥八代からなる 地名は社の意で、式内社足鹿神社の門前であったことによると思われる 江戸期、明
一三は八代村 昭二九より朝来郡朝来町八代 播但線新井駅南西
兵庫県 姫路市 八代 戦国期には八代村 江戸期、明一四頃までは南八代村と北八代村 明一五頃合併して八代村 大一四、四、一から姫路市八代 城
の北、北西

岡山県 総社市 八代 江戸期からの村名 木村山山麓の農村 高梁川の支流の新本川中流右岸 神（みわ）神社にちなむ 昭二九より総社市八代

島根県 仁多郡 仁多町 八代 江戸期からの村名 斐伊川支流の八代川流域 中国山地ぞい 木次線出雲八代駅付近

山口県 熊毛郡 熊毛町 八代 戦国期は八代郷 上古田畑開地のとき、五穀成就のため宇賀の神を八か所に祭り八つの社を八代に書くようになったと

いう 八代盆地の中にある 岩徳線高水駅北西

愛媛県 八幡浜市 八代 江戸期からの村名 五反田川支流の八代川流域 矢野郷の城砦が近くに八か所あったことによる 市の南部

行政地名から 地名は長いあいだには、広
消えた八代 があったり、狭せままったり、他
の場所へ移ったり、なくなってしまうこと
があります。
ここには公式にいわれなくなった八代を
あげました。公式にはいわれなくても、そ
れぞれの土地では今も「やしろ」と言つて
いるところもあるでしょう。

〔昔の名〕 〔今の所在地〕

〔由来〕

〔位置〕

八代村（青森県 弘前市 鼻和） 江戸より明九 貞享のころ 船水村の枝村 高九二石余 鼻和庄のうち 岩木川上流左岸 市街の北西方

八代村（埼玉県 北葛飾郡 幸手町 神扇） 明二二より昭三〇の自治体名 八か村が合併して成立 八代耕地と通称 東北本線久喜駅東約七[＊]

八代町（富山県 魚津市） 江戸期より昭四七の町名 田地方八幡社の社つづきで、社を八代と記す。昭四七より魚津市上口二丁目・新角川二丁目

八代郷（京都府 北桑田郡 京北町 矢代中） 平安末の郷名 桂川支流の明石川源流にある矢代中に比定 山陰本線殿田駅東八[＊]

八代村（岡山県 津山市 吉見） 江戸より明五 吉井川支流の加茂川流域 吉見の北部 因美線三浦駅付近

八代郷（鳥取県 八頭郡 用瀬町） 江戸期の郷名 社郷の異称 因美線因幡社駅付近

八代郷（鳥取県 倉吉市） 平安より室町の郷名 伯耆国府の所在地 明二二より社村 昭二八より倉吉市 国府川の中下流 倉吉線西倉吉駅西か

八代村（島根県 大田市 川本町） 明三二より昭三二の遷摩郡の村名 八代姫命神社の名による 大田市 川本町にまたがる

八代地区（山口県 美禰郡 秋芳町 嘉万） 江戸期からの嘉万（かま）村のうちの小村 農を主とする山村 秋吉台国定公園の西

八代町（愛媛県 松山市） 昭五より三九松山市の町名 今千船町、湊町、竹原町となる

八代村（大分県 速見郡 日出町 真那井） 江戸期より明八の村名 八代川流域 日豊本線大神駅東 別府市北東方